

天声人語

「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄は1937年、議会での演説を前に、辞世の歌を詠んでいた。軍部の横暴に批判を加えようとする演説で、暗殺をも覚悟しなければならなかったから

だ。回想録の『民権闘争七十年』にある▼「命にもかへてけふなす言説をわが大君はいかに見たまふ」。前年に起きた2・26事件は、閣僚ら幾人もの生命を奪った。軍事クーデターとしては未遂に終わったが、影響は続いた。テロの恐怖を背景に軍部が発言力を増していった▼時代や国は変わっても悲劇は続くのか。トルコで軍の一部が企てたクーデターは、多くの犠牲を伴いながらも鎮圧された。それでも懸念はなくなりそうにない。これを機に政府がこれまで以上に強権的になるのではとの見方がある▼政権はエルドアン大統領の政敵とされる人物を事件の首謀者だと断定し、関係が近いとみられる裁判官ら2千人余の職権も一時停止した。そうでなくとも大統領に批判的な学者や記者が摘発され、言論の自由が脅かされている▼軍事政権が生まれる最悪の事態は避けられた。しかし再発防止を理由に独裁傾向を強めれば、それもまた社会を不安定にするのではないか▼5年ほど前、首相だったエルドアン氏を取材した。経済が好調で世界の資金が集まるのが誇らしそうで、「お金を置くのに安全な港だと世界から見られている」と語っていた。一転して政治も経済も不安定化する昨今である。対話抜きに腕力だけでのしげるとは、とても思えない。

2016・7・18